

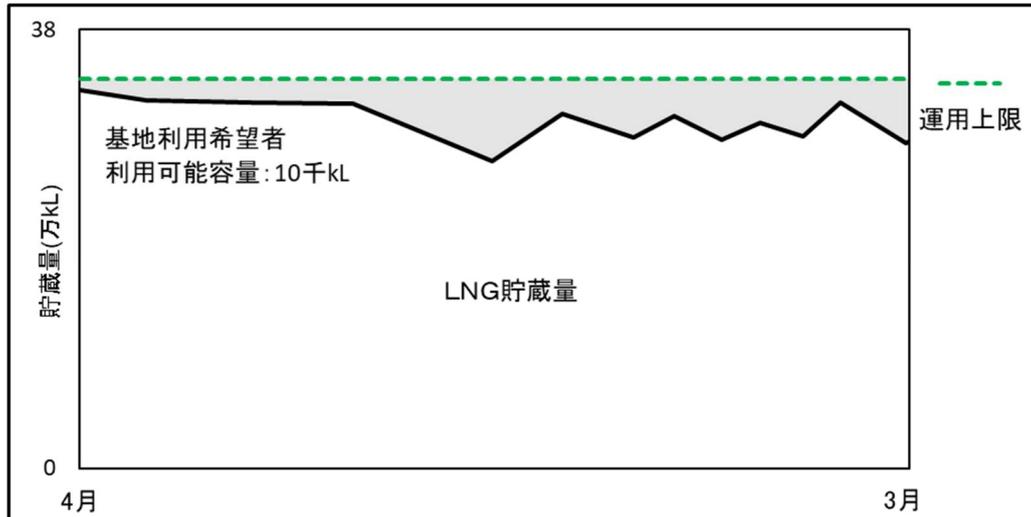
## 液化ガス貯蔵設備の容量等

### 1. 貯蔵設備およびガス発生設備

貯蔵設備	ガス発生設備	
180,000kl×1基 200,000kl×1基	スチームエJECTター式 LNG 気化器	40t/h×1基
	スチームエJECTター式 LNG 気化器	80t/h×1基
	サブマージド式 LNG 気化器	80t/h×1基
	サブマージド式 LNG 気化器	97t/h×1基

### 2. 液化ガス貯槽設備における液化ガスの貯蔵の余力の見通し

【イメージ図】

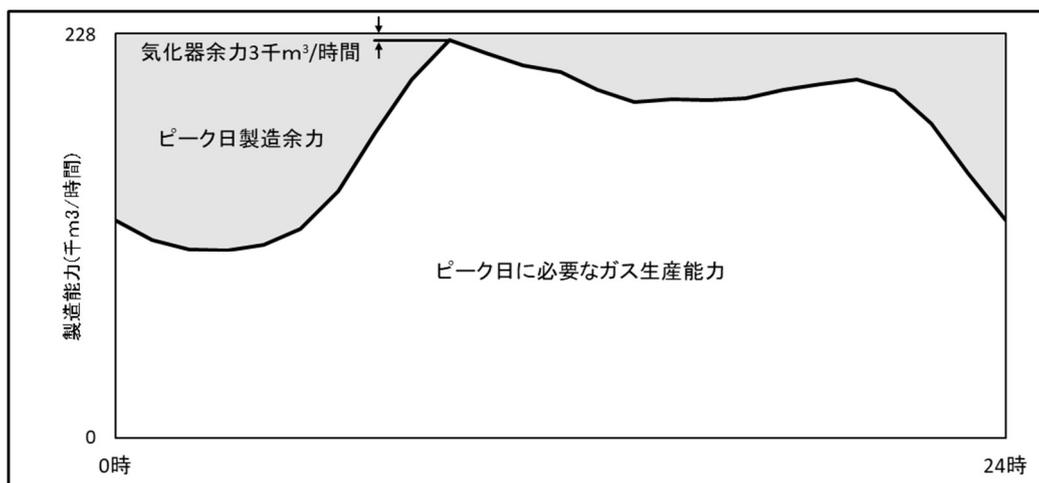


(注) 上図は当社のLNG貯蔵のイメージを示すものです。貯蔵余力についてはルームレント方式の場合、10千KL(容量ベース)となりますが、実際の貯蔵余力はLNGの受入状況、ガス(電力)の需要動向、設備工事等によって大きく変動いたします。

なお、ルームシェア方式についてはご利用可能な場合がございます。詳細につきましてはお問い合わせください。

### 3. ガス発生設備におけるガスの製造の余力の見通し

【イメージ図】



(注) 上図は当社のガス製造余力のイメージを示すものです。気化器余力は3千m<sup>3</sup>/時間となりますが、実際の製造余力は、ガス(電力)の需要動向、気化設備等の定期点検工事・設備工事等によって大きく変動いたします。

また、LNG在庫の熱量によっては熱量調整能力、LPG調達限界の影響を受け、ガス製造余力に影響を与える可能性があります。

4. 利用可能な船舶の種類及び船型並びに液化ガスの種類及び品質

1) 利用可能な船舶の種類及び船型

モス型		メンブレン型
従来型	連続型	
17. 7万m <sup>3</sup> 級	18. 0万m <sup>3</sup> 級	18. 0万m <sup>3</sup> 級

(注) 石狩 LNG 基地に入港実績のない LNG 船の利用にあたっては、「新形式 LNG 運搬船及び LNG 運搬船の大型化に係る航行安全・防災対策の安全対策評価ガイドライン」(日本海難防止協会)にもとづく利用可否の検討が必要となります。

また、船舶の利用可否の判断については、船陸整合性の確認を必要とし、確認結果により利用することができない場合があります。

2) 受入可能なLNGの熱量等の範囲、組成その他の液化ガスの受入条件

熱量の範囲	42～45MJ/m <sup>3</sup> N
組 成	メタン 84. 0 モル%以上 ブタン以上 2. 0モル%以下 ペンタン以上 0. 1モル%以下 N <sub>2</sub> 0. 2モル%以下
その他	固形またはその他の不純物および異物を含まない事

(注) 受け入れる事が出来るLNGの品質は、個別の利用条件やタンク運用実態によって異なるため、熱量調整能力の余力により、上記の範囲内であっても受け入れ不可となる場合があります。

5. 配船計画の策定期の見通し

N年度分の配船計画の策定スケジュールは概ね以下の通りです。

N-1年度 7月 ……LNG売主との間で配船協議を開始

N-1年度 9月～2月ごろ……LNG売主との間で年間配船計画を策定

(注) 上記はおおよその策定スケジュールであり、具体的な配船計画策定スケジュールは、様々なLNGプロジェクトによって異なります。

以 上